

墮罪後の欲望における意志的側面——アウグスティヌス『三位一体』10-12巻の分析——

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2024-02-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡邊, 蘭子 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000104

[論文]

墮罪後の欲望における意志的側面

—アウグスティヌス『三位一体』10-12巻の分析—

渡 邊 蘭 子

序

本論文では、アウグスティヌスが後期において墮罪後の人間に生じる欲望をどのように捉えていたのかを考察する。アウグスティヌスは、後期に行われたペラギウス派との論争の中で、墮罪後の人間は人類始祖の墮罪によって生じた原罪を負っており、よって墮罪後の人間が犯す罪の多くは、人類始祖の墮罪によって生じた罰であることを強調した。そして、墮罪後の人間の内に生じる歪んだ欲望についても、それは身体に生じるようになった罰として説かれる傾向にあった。しかし、ペラギウス派論争期(412年～)に書かれつつも、論争の文脈から離れた著作である『三位一体』10-12巻(413-6年¹)においては、墮罪後の人間における歪んだ欲望は単に罰として身体に生じるというだけではなく、自己を正しく認識することができずに「高慢」になって神から離れるという、人間の意志に関わる問題としても考えられている。

ペラギウス派との論争においては、意志的な罪の問題は争点の一つであった。ペラギウス派は原罪を認めず、罪は模倣によって生じ、個人が高慢となって意志的に犯すものであると主張する傾向にあった。こうした主張に対して、アウグスティヌスは、人類全体が原罪を被っていることを主張し、墮罪後の人間の意志の無力さを強調した。そしてここから、個人が意志的に罪を犯すという点は(初期の対マニ教の頃と比較すると)ほとんど論じられなくなったと考えられる。この点について Nisula は、アウグスティヌスにおける欲望の問題について論じた著書の中で、アウグスティヌスにおいて欲望がどのようにして罰として捉えられるようになったのかを考察している。アウグスティヌスは初期には人間が意志的で自由な罪を犯すことを主張していたが、徐々にその意味が変化し、人類始祖のみが、

¹ 宮谷宣史『アウグスティヌス』、講談社、2004年、332頁。

意志的で自由な罪を犯すことができた—これは神に背く「高慢」によって生じた—と考えるようになった。そして、墮罪後の人間はその罰を受けていることを強調するようになった。こうした議論の中で、墮罪後の欲望が罰であるという点も強調されたという²。

しかし、Cavadini は、墮罪後の人間に生じる歪んだ欲望は、単に罰として生じているというだけでなく、そこに神に背く意志的なあり方が存在していることを指摘した。当時アウグスティヌスは、「肉の欲望 (concupiscentia carnis)」(主に身体的欲望、特に性的欲望を指す) について、ペラギウス派のユリアヌスと激しく論争した。現世における性的欲望を本性的なものとするユリアヌスに対し、アウグスティヌスはそれを本性的ではない歪んだものであると主張した。こうしたアウグスティヌスの見解に対し、性や身体を蔑視しているとして批判する論者も多い³。しかし、Cavadini によれば、そこでアウグスティヌスは墮罪後の人間における性的欲望の本質的な要素として、歪んだ自由を求める欲望、力を求める欲望・意志 ('the lust for power', 'the will to power') があることを見抜いたという。それはアウグスティヌスが『神の国』で 'libido dominandi'⁴ と呼んでいるものである。そして、それが恥ずべきものである理由は、『神の国』の序で述べられているように、そうした力や自由、支配を求める欲望を持つ者が、結局その欲望によって支配されるからである。自分の意志に従わない性的欲望は、支配しようとして支配できないこうしたあり方を暴露している。しかし、ユリアヌスはそれを性的な「力」(potestas) と呼んで美化し、真の自由・力の喪失を隠した。アウグスティヌスはユリアヌスがこのように墮罪後の人間の現実を見つめないことを批判した。アウグスティヌスにとっては墮罪後の性的欲望は自己満足・高慢のあらわれであるという⁵。しかし、こうした点についてはペラギウス派論争著作においてほとんど論じられていないため、Cavadini もアウグスティヌスの著作を根拠にした詳細な考察は行っていない。

よって本論文では、『三位一体』10-12 巻の分析によって、墮罪後の人間の欲望のあり方を意志的な側面も含めて分析することを試みる⁶。『三位一体』10-12 巻では、神の似像と

² Nisula, Timo, *Augustine and the Functions of Concupiscentia*, Supplements to Vigiliae Christianae: Texts and Studies of Early Christian Life and Language, 116, Brill, 2012, Chapter 3.

³ 代表的なものは以下。Heinemann, Uta Ranke-, *Eunuchen für das Himmelreich: Katholische Kirche und Sexualität von Jesus bis Benedikt XVI*, Heyne Verlag, 1991 (高木昌史, 高木万里子, 松島富美代訳『カトリック教会と性の歴史』, 三交社, 1996年。).

⁴ 『神の国』1, 序; 1, 30; 14, 15; 14, 28.

⁵ Cavadini, John C., "Reconsidering Augustine on Marriage and Concupiscentia," *Augustinian Studies*, 48 (1), 2017, pp. 183-99.

⁶ アウグスティヌスが罪の根源として「高慢」(superbia) を考えており、これが思想的に重要な位置を占めていることはしばしば指摘されてきた。

してつくられた人間精神の構造が心理学的に分析されており、その中で墮罪後の人間精神の罪のあり方が説明されている⁷。そこでは「肉的な快樂」をはじめとするさまざまな悲惨が言及される。そして、人間の欲望の問題が言及される際は、ペラギウス派論争著作でよく用いられた用語である‘concupiscentia’ではなく、‘voluptas’や‘delectatio’といった用語が使われている。ここでアウグスティヌスは、身体的な欲望や性的欲望という限定された捉え方で欲望を捉えるのではなく、それらを含めた欲望全体に普遍的に存在する本質的要素を問題にしている。そして、そこでは確かに人間の歪んだ欲望は罰的・受動的なものとしても考えられているが、その中に神に背く意志的な「高慢」のあり方が含みこまれていることが述べられている。その点を明らかにするため、以下では、まず罰的・受動的なあり方について述べられている箇所を確認し、次に高慢という意志的・能動的なあり方について述べられている箇所をみていく。そして最後に、両者をつなぐ、自己を正しく認識できないという問題について考察する。

1. 罰的・受動的なあり方

はじめに、歪んだ欲望が人間に生じる際、罰として、受動的に生じると述べられている箇所をみていく⁸。

このように自分を知らないこと〔non se nosse〕と自分を考えないこと〔non se cogitare〕とは別である。(というのも、多くの学問に精通した人が、医術について考え

MacQueen, D.J., “Contemptus Dei: St. Augustine on the Disorder of Pride in Society, and Its Remedies,” *Recherches augustiniennes*, 9, 1973, pp. 227-93; “Augustine on Superbia: The Historical Background and Sources of His Doctrine,” *Mélanges de science religieuse*, 34, 1977, pp. 193-211; Torchia, N. Joseph, “St. Augustine’s treatment of superbia and its Plotinian Affinities,” *Augustinian Studies*, 18, Philosophy Documentation Center, 1987, pp. 66-80; Procopé, J.F., “Initium omnis peccati superbia”, Elizabeth E. Livingstone ed., *Studia Patristica*, 22, Peeters: Leuven, 1989, pp. 315-20; Bruning, Bernard, “Augustine’s Concept of Pride: Ut Cancer Serpit (*En. Ps.* 1,1)”, *Augustiniana*, 63(1), Peeters Publishers, 2013, pp. 9-81. 概説的な研究は以下。Cavadini, John C., “Pride,” Fitzgerald, Allan D., ed., *Augustine through the Ages: An Encyclopedia*, Grand Rapids: Eerdmans, 1999, pp. 679-84.

こうした研究の蓄積はあるものの、多くの研究では人類始祖の罪における高慢に焦点が当てられている。管見の限り、墮罪後の欲望における意志的な側面(神に背く高慢のあり方)についての詳細な分析は行われていない。

⁷ 『三位一体』は内容的に前半と後半に区分される。前半では三位一体の積義的・教義学的説明がなされ、後半では三位一体の秘儀がより内的な仕方、つまり神の似像である人間精神の思索をとおして探求されている(泉治典「解説」、『アウグスティヌス著作集28』、教文館、2004年、559-71頁)。

⁸ 以下で述べる魂の誤りについての分析は *Bibliothèque Augustinienne. Oeuvres de Saint Augustin* (以下、BA) の次の注を参考にした。Agaësse, Paul, S.J., BA 16, Note 27, 35.

ているために文法のことを考えていないとき、その人は文法を知らない、と私たちは言わない。) それゆえ、自分を知らないことと自分を考えないことは別であり、考えるべき自分へと何らかの仕方で帰るときであっても、愛〔amor〕によって長く考えて、注意〔cura〕の膠によって固着した諸々のものを自分とともに引き寄せるほどに愛の力は大きい。そして、かの諸々のものは肉の感覚によって外側で気に入った物体〔corpora〕であり、それらの長い間のある種の親密さ〔familiaritas〕によって〔精神は〕巻き込まれるが、いわば非物体的な本性の領域においては物体そのものを自分とともに内部で運び込むことはできないので、それらの像〔imagines〕を絡ませ、自身において、自身から作られた〔諸々の〕もの〔像〕を引きずりこむ⁹。

ここでは自分を「知らないこと」と「考えないこと」は別であるとの説明がなされている。例えば、学問に精通した人が医術について考えていて文法について考えていないときでも、文法を知らないわけではない。文法は知っていてもそこには注意を向けていないため考えていない。よって、ここで「考える」とは注意を向けることを含んでいると思われる。そして、注意を向けていなくとも何かを「知っている」という状態はありうる。よって、精神は自分を「知っている」が、自分を「考えない」ということが起こる。それでは精神が自分自身を考えないことはどのようにして起こっているのか。精神は考えるべき自分へと帰るときも、「肉の感覚によって外側で気に入った物体」を長い間愛してきたため、それらへの注意が膠のようになってそれらと自分を結びつけているという。そうした親密性によって精神は巻き込まれる。そして、その物体そのものを自分の中に運び入れることはできないので、それらの像を自分の中に作り、それらの像と自分を絡ませてしまうという。そこから、自分を考えようとしてもそれらの像と一緒に引きずり込んでしまうという。

こうした外的な物体やその像との親密性については 11 巻と 12 巻で特に論じられている。そこでは神の似像であり「内なる人」といわれる精神に対して、神の似像ではない感

⁹ 『三位一体』 10, 5, 7: Ita cum aliud sit non se nosse, aliud non se cogitare (neque enim multarum doctrinarum peritum ignorare grammaticam dicimus cum eam non cogitat quia de medicinae arte tunc cogitat), cum ergo aliud sit non se nosse, aliud non se cogitare, tanta vis est amoris ut ea quae cum amore diu cogitaverit eisque curae glutino inhaeserit attrahat secum etiam cum ad se cogitandam quodam modo redit. Et quia illa corpora sunt quae foris per sensus carnis adamavit eorumque diuturna quadam familiaritate implicata est, nec secum potest introrsus tamquam in regionem incorporea naturae ipsa corpora inferre, imagines eorum convolvit et rapit factas in semet ipsa de semet ipsa.

『三位一体』の引用は BA 15, 16 を使用する。また、訳出の際、アウグスティヌス著作集（教文館）および BA の仏語訳を参考にした。

覚的・物的なものに関わる「外なる人」といわれるものについての説明が詳細になされている。ここで「外なる人」の三一性として、二種類が挙げられる。一つ目の三一性は、「見られる物体」(corpus quod videtur)と、感覚に刻まれる物体の似像である「視像」(visio)、そして、感覚を物体に向ける精神の「志向」(intentio)である¹⁰。そしてもう一つは、見られる物体がなくなったとしても記憶の中で生じる三一性である。それは「記憶」(memoria)、そしてその記憶によってそこにはない物体が思考されるときに作り上げられる「内的な視像」(interna visio)、そして、両者を結びつける「意志」(voluntas)である¹¹。この二つの三一性は実際に場所的に存在するかどうかという違いはあるが、どちらも物的・感覚的なものに関わるため、「外なる人」の三一性といわれている。そして、精神はそうした物的・感覚的なものに引きずられやすいという。特に精神の「誤り」にとって重大なのは、目の前に物体そのものがなくとも、記憶によってつくられる物体の像に引きずられることであり、そうして自分を考えることができなくなるという。

それでは、どのように〔精神は〕自分自身を探求し、見つけるのか、これは不思議な問題である。〔精神は〕探求するためにどこへ向かい、見つけるためにどこに来るのか。というのも精神ほど精神の内にあるものが何かあるだろうか。しかし、〔精神が〕愛によって考えるもの、それは感覚的なものであり、それはまた物的なものであるが、そのようなものに、〔精神は〕愛によって慣らされているので、それらの像なしには自分の中にいることができない。ここから、精神に誤りの醜さ〔erroris dedecus〕が生じる。それは、自分だけを見るために、感覚的な諸物の像を自分から引き離すということができないときに生じる。というのも、それら〔感覚的な諸物の像〕は愛の膠によって不思議に結合しているからである。そしてこれが精神の不潔である。なぜなら、〔精神は〕自分だけを考えようと努めても、それなしには自分を考えることができないようなものを自分であると思うからである。それゆえ、自分自身を認識するように精神が命じられたとき、あたかも自分から引き離されたように自分を探求するのではなく、自分に付け加えられたものを引き離すべきである¹²。

¹⁰ Ibid., 11, 2, 5.

¹¹ Ibid., 11, 3, 6.

¹² Ibid., 10, 8, 11 : Ergo se ipsam quemadmodum quaerat et inveniat, mirabilis quaestio est quo tendat ut quaerat, aut quo veniat ut inveniat. Quid enim tam in mente quam mens est? Sed quia in iis est quae cum amore cogitat, sensibilibus autem, id est corporalibus, cum amore assuefacta est, non valet sine imaginibus eorum esse in semetipsa. Hinc ei oboritur erroris dedecus, dum rerum sensarum imagines secerere a se non potest, ut se solam videat. Cohaeserunt enim mirabiliter glutino amoris : et haec est ejus

精神は精神の内にあるのに、どのようにして自分を探求し見つけるのか、と問う。その理由は、精神が愛によって感覚的なものや物的なものを考え、愛によってそれらと習慣的に結びついているため、それらの像なしには自分の中にいることができず、自分から感覚的な諸物の像を引き離すことができないためであるという。自分を考えようとしてもそうした像と自分を引き離すことはできずに混同してしまう。こうしたことが精神における「誤りの醜さ」といわれている。

そして、感覚的・物的なものの像と自分を混同してしまうと、精神はそれらを神的なものと考えてしまうという。

そして、物的な諸物の、欺くような見せかけの像を内部でつかみ、偽りの考えによって〔それらを〕つくりあげると、それ〔魂〕にとっては、そのようなもの以外に神的なものは何もないように見えてしまう。そして〔魂は〕私的に貪欲になって偽りに満たされ、私的に放埒になって力が無くなる¹³。

精神は感覚的・物的なものの像に惑わされると、そういったものだけが神的なもののように見えてしまう。そうすると、神に向かう公的な仕方ではなく私的な状態になり、貪欲で誤りに満たされ、放埒になり、力が無くなってしまうという。ここで、歪んだ欲望の問題が現れている。

このように、精神は感覚的・物的なものの像に引きずられて、自分を考えることができなくなり、それらが神的なものに見えてしまうことから、それらに溺れてしまうと語られていた。しかし、そもそもなぜ精神が感覚的・物的なものの像に引きずられてしまうのか。その原因としては墮罪による罰が考えられている。アウグスティヌスによれば、精神は墮罪後の罰によって感覚的・物的なものにより親密であるという。

そして、まさにかの、それによって私たちが死すべきものとなり、肉のなものとなったところの私たちの状態の秩序によって、理知的なものよりも可視的なものをより容

immunditia, quoniam dum se solam nititur cogitare, hoc se putat esse sine quo se non potest cogitare. Cum igitur ei praecipitur ut se ipsam cognoscat, non se tanquam sibi detracta sit quaerat; sed id quod sibi addidit detrahatur.

¹³ Ibid., 12, 10, 15: et corporearum rerum fallacia simulacra introrsus rapiens et vana meditatione componens, ut ei nec divinum aliquid nisi tale, videatur, privatim avara fetatur erroribus, et privatim prodiga inanitur viribus.

易に、そしていわばより親密に接する¹⁴。

人類始祖の墮罪が生じていなければ、人間が死ぬことはなかったのであり、また、魂が肉的なものになることはなかった。しかし、墮罪によって、そのような状態になってしまった。ここから、墮罪後の人間の精神においては、理知的なものよりも可視的なものにより容易に、より親密に接するという。このように精神は人類始祖の罪の罰によって、はじめから感覚的・物的なものに結びつきやすい。このことが出発点となって、感覚的・物的なものに引きずられてしまい、結果、欲望に駆られることになる。

2. 意志的・能動的なあり方

他方で、以上のように罰として欲望に駆られるようになるという受動的なあり方の中に、意志的・能動的な「高慢」のあり方が潜んでいると述べられている。どのように潜んでいるのかについて以下で分析する。

10巻の冒頭では、精神がすでに自分自身を知っている（*nosse*）ことが語られるが、それでもなお「汝自身を知れ」というように、精神が自分自身を認識する（*cognoscere*）よう命じられている理由について、アウグスティヌスは以下のように考えを述べる。

それでは、なぜ、それ〔精神〕は自分自身を認識するように〔*ut se ipsam cognoscat*〕と命じられているのか。私は信じる、それは〔精神が〕自分自身を考え、自分の本性に従って生きるため、すなわち自分の本性に従って秩序づけられる—つまり、それに対して自分が下に置かれるべきものの下に、それらに対して自分が上に置かれるべきものの上に、すなわち、支配されるべきものの下に、支配すべきものの上に—〔秩序づけられる〕ことを欲するためであると¹⁵。

¹⁴ *Ibid.*, 11, 1, 1: Et illo ipso ordine conditionis nostrae quo mortales atque carnales effecti sumus, facilius et quasi familiaris visibilia quam intellegibilia pertractamus

¹⁵ *Ibid.*, 10, 5, 7: Ut quid ergo ei praeceptum est, ut se ipsam cognoscat? Credo, ut se ipsam cogitet, et secundum naturam suam vivat, is est, ut secundum naturam suam ordinari appetat, sub eo scilicet cui subdenda est, supra ea quibus praepoenda est; sub illo a quo regi debet, supra ea quae regere debet.

10, 5, 7の解釈とその困難さについては以下の研究で述べられている。小沢隆之「アウグスティヌスにおける認識と生をめぐる—『三位一体論』10・5・7の解釈」, 教父研究会編『パトリステイカ』, 第24・25号合併号, 2022年, 116-33頁。

アウグスティヌスによれば、精神が自分のことを知っているにもかかわらず、自分自身を認識するように命じられている理由は、精神が自分自身を考えて、自分の本性に従って生きるため、すなわち自分の本性に従って秩序づけられることを欲するためであるという。その本性とはまず、精神が、「自分が下に置かれるべきものの下」・「支配されるべきものの下」にあることである。これは神のことであると考えられる¹⁶。また、精神は、「それらに対して自分が上に置かれるべきものの上」・「支配すべきものの上」にあるべきであるという。精神が支配すべきもの、精神よりも下にあるべきものとは、物的なものや身体的なものであると考えられる¹⁷。精神はこのような本性の秩序に従って生きるべきであり、このようなものとして自分自身を考えるべきであるという。しかし精神はそのように生きないことが多くあるという。そのことが自分自身を認識するよう命じられている理由である。

たしかに、〔精神は〕歪んだ欲望〔*cupiditas prava*〕によって多くのことを自分を忘れたかのようにする。すなわち、神であるところのよりすぐれた本性において、内部に、ある美を見るが、それを享受する〔*fruo*〕ためにとどまらなければならないのに、それを自分に帰そうと欲し、かの方〔神〕によってかの方〔神〕に似るのではなく、自分自身によってかの方〔神〕であるところのものであることを欲することで、その方〔神〕から引き離され、乱され、より大きくなると思うが、より小さくなっていく〔*labitur in minus et minus, quod putat amplius et amplius*〕。というのも、ただひとり満ちているかの方〔神〕から離れることで、精神は自分にも満足せず、どんなものにも満足しなくなるからである。それゆえに、欠乏と困窮によって自分の行いと、それによって得られる落ち着いたない快樂〔*delectatio*〕に過度に没頭するようになる。こうして外にある諸物—〔精神は〕これらの知られた類のものを愛するが、かなり注意して握んでいなければ失われうると感じる—から知を得ようという欲望によって平安を損なう¹⁸。

¹⁶ Agaësseによれば、真の内面性とは、自己に向かうだけではなく、神に向かうことである。真の自己認識は神への回心から得られるという（BA 16, Note 27）。

¹⁷ 『三位一体論』の第10巻では、精神を物的なものとして思いなすべきではないことが述べられている。多くの哲学者たちは精神を「血」や「脳」、「心臓」であると考えたが、アウグスティヌスはそのように精神を物的・身体的なものとしてとらえるべきではないと述べる。こうした文脈から、ここで精神が支配すべきもの、精神よりも下にあるべきものとは、物的・身体的なものであると考えられる。

¹⁸ Ibid. 10, 5, 7: *Multa enim per cupiditatem pravam, tanquam sui sit oblita, sic agit. Videt enim quaedam intrinsecus pulchra, in praestantiorre natura quae Deus est: et cum debeat ut eis fruatur, volens*

精神は本来、自分の本性的な秩序に従って生きるべきであるのに、そのような自分を忘れたかのように、「歪んだ欲望」によって多くのことをなすという。精神は、自分よりもすぐれた神において、内部における美¹⁹を見て、それを享受するべきである。このことは、あるべき本性の秩序に従うあり方である。しかし、精神はそれ（美）を自分に帰そうと欲し、神によって神に似るのではなく、自分自身によって神になろうと欲したという。これが「高慢」である²⁰。これは本性的な秩序とは異なるあり方である。そしてこのことによって悲惨な状態になるという。神だけが満ちている存在であるが、その神から離れることによって精神は自分にもその他どんなものにも満足することができなくなる。それが欠乏と困窮である。そうした欠乏や困窮をなんとか満たそうとするために、神ではないものへ向かって何かを行い、それによって得られる快樂に没頭する。しかし、その快樂は落ち着きのないものである。なぜなら、外にあるものはかなり注意していなければすぐに失われてしまうと感ぜられるような可變的なものだからである。そしてこのような外にあるものから知を得ようとする欲望によって平安が損なわれる。以上のことが「より大きくなると思うが、より小さくなっていく」という逆説的な表現で表されている。すなわち、精神には従うべき本性的な秩序があり、神を享受すべくとどまらなければならないのに、神から離れて、神ではなく自分自身によって神になろうと欲した。これが「より大きくなると思う」ことである。しかし、それでは神のようになることはできず、何にも満足できずに快樂に

ea sibi tribuere, et non ex illo similis illius, sed ex se ipsa esse quod ile est, avertitur ab eo, moveturque et labitur in minus et minus, quod putat amplius et amplius; quia nec ipsa sibi, nec ei quidquam sufficit recedenti ab illo qui solus sufficit: ideoque per egestatem ac difficultatem fit nimis intenta in actiones suas et inquietas delectationes quas per eas colligit; atque ita cupiditate acquirendi notitias ex iis quae foris sunt, quorum cognitum genus amat et sentit amitti posse, nisi impensa cura teneatur, perdit securitatem, ...

¹⁹ ここで唐突に「美」が言及される。アウグスティヌスは反マニ教徒著作である『ファウストゥス駁論』の中で、神への秩序づけられた従順には朽ちることのない美があることを述べていることから、ここでの「美」も神への従順によって正しく秩序づけられることからもたらされる永遠的な美のことであると考えられる (Cf. Nisula, op. cit., pp. 83-6)。ただし、pulchra と複数形になっている理由についてはさらに考察する必要がある。

²⁰ 「高慢 *superbia*」という表現は以下の箇所でも明確に現れている。

「たしかに、魂は自分の力を愛すると、共通の全体から私的な部分へ落ちる。〔魂が〕被造物全体における支配者である神に従えば、その〔神の〕法によって完全に支配されえたが、「罪の始め」(シラ書 10・15 [13]) と言われる〔神に〕背くかの高慢 [*superbia*] によって、〔魂は〕全体以上のものを欲し、そして自分の法によってそれを支配しようと企てた。〔しかし〕全体よりも大きいものはないゆえに、〔結局〕部分的なものへの気遣いに駆り立てられてる。こうしてより大きなものを欲することで〔逆に〕小さくなる」(12, 9, 14)

Potestatem quippe suam diligens anima, a communi universo ad privatam partem prolabitur: et apostatica illa *superbia*, quod <<initium peccati>> dicitur (Eccli., x, 15), cum in universitate creaturae Deum rectorem secuta, legibus ejus optime gubernari potuisset, plus aliquid universo appetens, atque id sua lege gubernare molita, quia nihil est amplius universitate, in curam partilem truditur, et sic aliquid amplius concupiscendo minuitur;

没頭するが、それは落ち着きのないものであり、平安はない。このことが「より小さくなっていく」ことである。後者については1.の罰的・受動的なあり方でも述べられており、そこでは、魂が「私的に貪欲になって偽りに満たされ、私的に放埒になって力が無くなる」と表現されていた。

さらに、こうした逆説的な現象については人間における神の似像という観点からも説明されている。

そうして〔人間〕は神の類似〔similitudo Dei〕を転倒したかたちで求める欲求〔appetitus〕から始まって、獣の類似へと達する。このようにして最初の衣から裸になり、可死性の皮衣をまとうようになったのである（創3・21）。人間の真の誉れは神の似像〔imago〕と類似〔similitudo〕であって、それはそれを刻んだ方に向かわないならば、保護されないからである²¹。

この箇所は12巻の内容である。12巻では、人類始祖の墮罪における原因と結果が、墮罪後の人間精神における罪の原因と結果に重ねられながら議論が展開している。人間は神の似像としてつくられた。そしてそれは神に向かうことによってこそ保護される。逆に神に向かわないならばその似像性は保護されることがない。しかし、精神が神の類似を転倒したかたちで求めようと欲することによって、神とはほど遠い獣のような存在になってしまうという。敷衍すると、精神は神に固着することによってこそ神に似ることができはざである。ここでの「神に似る」とは具体的には、自分以外の被造物よりも上にいて、それらを正しく支配することである²²。これは本性の秩序として前に述べられていた。しかし、精神は神によってではなく自分自身によって神に似ようとする「神の類似を転倒したかたちで求める欲求」によって獣のようになるという²³。この「獣の類似」とは、先ほど述べた落ち着きのない快樂に没頭してしまうことであろう。神から離れることによって、神のように被造物を支配するどころか、結局物的なものや身体的なものへの快樂に没頭してしまい、獣のような存在になってしまう。こうして支配すべきものの上にいることが

²¹ 『三位一体』12, 11, 16: sic lubricus deficiendi motus neglegentes minutatim occupat, et incipiens a perverso appetitu similitudinis Dei, pervenit ad similitudinem pecorum. Inde est quod nudati stola prima, pelliceas tunicas mortalitate meruerunt (Gen., III, 21). Honor enim hominis verus est imago et similitudo Dei, quae non custoditur nisi ad ipsum a quo imprimitur.

²² この点については『告白』7, 7, 11でも述べられている。

²³ こうしたことは『神の国』14, 13でも説明されている。『神の国』では特に人類始祖の罪について述べられている。

できなくなる。これが「より大きくなると思うが、より小さくなっていく」という逆説的な現象である。このように、神の似像としてつくられた精神は、本性的な秩序に従わない転倒した仕方神に似ることを求めることによって、その似像性が発揮されず、逆に失われてしまう²⁴。

そして、神に背く高慢によって魂が欲望に駆られてしまうという事態は、自分が犯した罪に対する罰であるが、アウグスティヌスにおいては、それは神が下す罰というよりも秩序の中で生じる必然的な出来事であると考えられている。

しかし実際は、自分の支配力〔potestas〕を試そうとする欲望、いわば自分の重力によって、自分自身という、いわば中間〔medium〕へと倒れる。そうしてかの方〔神〕のように何もの下にもいないことを欲するが、自分の中間性〔medietas〕自体における罰によって最下層、すなわち獣が喜ぶところにまで追いやられることになる²⁵。

ここでも、先ほどの「より大きくなると思うが、より小さくなる」という逆説的な内容が語られている。「自分の支配力を試そうという欲望」とは、神から離れて自分で神のようにすべてを支配しようと欲する欲望である²⁶。しかし、そのようにして神から離れることによって、自分という「中間」〔medium〕に倒れるという。精神は神の下にあり、物的・身体的なものの上にいるべきである。それが精神のふさわしい中間性である²⁷。しかし、神から離れ、自分の支配力を試そうとして自分へと向かうと、自分の「重力」によって、そのままさらに下のもの、すなわち最下層である獣のようになってしまうという。これが「罰」と言われている。このように、アウグスティヌスにおいてはある種の階層的な秩序が考えられており、神から離れて自分に向かうことは即、罰としての感覚的・物的なものにとらわれて獣のようになることにつながっている²⁸。

²⁴ 墮罪後の罪の中に、このような歪んだ神の模倣があることは『告白』の2巻における梨盗みのエピソードの中でも描写されている。そこでは、盗みという禁じられた行いを罰せられずに行うことで、神の全能性・自由を歪んだ形で模倣したと語られている（『告白』2, 6, 14）。

²⁵ 『三位一体』12, 11, 16: *Cupiditate vero experiendae potestatis suae quodam nutu suo ad se ipsum tamquam ad medium proruit. Ita cum vult esse sicut ille sub nullo, et ab ipsa sui medietate poenaliter ad ima propellitur, id est, ad ea quibus pecora laetantur*

²⁶ Cf. *Ibid.*, 12, 9, 14.

²⁷ こうした中間性の思想はアウグスティヌスが初期から晩年に至るまで保持していた思想である。この思想の詳細については以下を参照。Bruning, *op. cit.*, pp. 30-37.

²⁸ こうした思想の背景にプロティノスの影響が考えられることは、アウグスティヌスにおける高慢についての研究によって明らかになっている。プロティノスは『エネアデス』の中で以下のように述べている。魂が一者から離れたとき、魂は「厚かましき」(ἡ τόλμα)を抱き、自分を「起源」(ἡ

3. 自己認識の欠如

以上からも明らかになりつつあるが、二つのあり方、すなわち高慢という意志的・能動的なあり方と罰的・受動的なあり方は混ざり合いながら生じている。アウグスティヌスによれば、感覚的・物的なものを神や、より公的なものへと関連付けるのではなく、それ自体に付着してしまうことを「恥ずべき欲望」(turpis cupiditas)と呼んでいる²⁹。そして、そうした欲望が生じるとき、魂においては以下のように意志的・能動的なあり方と罰的・受動的なあり方が同時に生じているという。

それ〔魂〕は、全体が管理されるところの法に背いて固有のことを行おうとすることをすべて、固有な身体をとおしてなすが、それを部分的に〔のみ〕手に入れる。そして物的な形や動きを楽しむが、それらを内部で自らとともに持つのではないので、記憶に結びついたそれらの像とともに〔魂は〕巻き込まれ、そして空想的な姦淫によって醜く汚される。その際魂は自分のすべてのつとめを次のような目的に関連付けている。それは、好奇心によって〔curiose〕身体的なものや時間的なものを身体感覚を通して求めることや、膨れ上がった尊大さによって〔tumido fastu〕身体的な感覚に渡された他の魂よりも優れているふりをする、あるいは肉的な快樂によって〔carnalis voluptatis〕汚れた渦に巻き込まれることである³⁰。

γένεσις) とし、一者と自分の区別を立てた。「たしかに、自ら(魂)にとっての悪のはじまり(Ἀρχὴ μὲν οὖν αὐταῖς τοῦ κακοῦ)は、厚かましき(ἡ τόλμα), 最初の区別(ἡ πρώτη ἐτερότης), そして自分を自分のものであるように欲したこと(τὸ βουλευθῆναι δὲ ἑαυτῶν εἶναι)である」(Plotin, *Ennéades* V, 1, 1, Texte établi et traduit par Émile Bréhier, Collection des universités de France.)。そのようにして魂が一者から離れると、魂は自分を見失い、物質的なものにとらわれて、多に分散し、破滅する。そこで、魂は自分が本来一者から出てきたものであることを悟り、知性のアイデアをたどって一者にもどり、一者に合一することが必要である(同上 VI, 9, 1; 8)。このことは、精神が自分自身によって神になろうとし、自分の支配力を試そうとして神から離れ、それによって即、物質的なものにとらわれて獣のようになってしまう、という上述したアウグスティヌスの構造と類似している。

ただし、両者はさまざまな点で異なっている。例えば、プロティノスにおいては、魂が自己の内部に向かっていき、そこで一者と合一することが目指されるが、アウグスティヌスにおいては、真の内面性とは自己の内面に向かっていくことだけではなく、神に対し、向かい合うことである(Agaësse, BA 16, Note 27.)。

²⁹ 『三位一体』11, 3, 6

³⁰ Ibid, 12, 9, 14: totumque illud ubi aliud proprium contra leges, quibus universitas administratur, agerit nititur, per corpus proprium gerit, quod partiliter possidet; atque ita formis et motibus corporalibus delectata, quia intus ea secum non habet, cum eorum imaginibus, quas memoriae fixit, involvitur, et phantastica fornicatione turpiter inquinatur, omnia officia sua ad eos fines referens, quibus curiose corporalia ac temporalia per corporis sensus quaerit, aut tumido fastu aliis animis corporeis sensibus deditis esse affectat excelior; aut coenoso gurgite carnalis voluptatis immergitur.

魂は神の「全体が管理されるところの法」、すなわち「神の法」に背き、自分の法によって被造物を支配しようとする。これは高慢のあり方である。しかし、魂はそれを部分的にしか手に入れられない。このことは上述した「大きくなると思うが、小さくなること」である。そしてそのときに起こっているのが次のことである。魂は感覚的・物的なものを楽しむが、そのときそれ自体を内部に入れ込むことはできないので、それらの像を記憶に保持する。そうして記憶に結びついた感覚的・物的なもの像とともに巻き込まれる。ここから「空想的な姦淫」(phantastica fornicatio)によって醜く汚される。このことは、先に1.で言及した現象—感覚的・物的なもの像に巻き込まれると、それらを神的なものと考え、自分を考えることができなくなり、結果として貪欲・偽り・放埒という状態になってしまう—と同様の現象である。その際、魂は、感覚的・物的なものを求めることを目的としているという。すなわち、身体的なものや感覚的なものを身体感覚をとおして求める「好奇心」や、他の人の魂よりも自分が優れているふりをする「尊大さ」、そして「肉的な快樂」を目的としている³¹。このように、感覚的・物的なことを求め、それを目的として行うことが「空想的な姦淫」である。このように、罰的・受動的なあり方と意志的・能動的なあり方は同時に生じている³²。

それでは、両者はどのようにつながっているのか。ここで注目すべきなのは「自分を考えられない」という事態である。1.で述べたように、精神はそもそも墮罪による罰によって感覚的・物的なものとの親密であり、そこからそれらの像に引きずられやすい。そうして自分を考えようと思っても、そうした感覚的・物的なもの像と自分を引き離すことができず、正しく自分を考えることができなくなる。そして、感覚的・物的なものを神的なもののように考えてしまい、その結果、私的で貪欲な状態に陥ってしまう。上述したように、自分を考えることは、自分の本性的秩序である、神に従い、物的なものや身体的なものを支配するという秩序に従うことであり、そうした自分を考えることであった。

³¹ この三つはアウグスティヌスにおいてよく並べて語られる悪徳である。ちなみに二番目の「尊大さ」(fastus)とは、「罪のはじめ」の「高慢」とは異なるものである。「高慢」が神に背き自分をたのみとするという根本的な傲慢であるのに対し、「尊大さ」とは、他の人間に対して、自分がすぐれているように考え、ふるまうことである。これは「高慢」の罪の結果生じた墮罪後の人間における性質である。しかし、やはり「尊大さ」も転倒した形で神に似ようとするあり方、すなわち自分が他の人よりも上に立って支配したいというあり方であり、「罪のはじめ」の「高慢」とも通じる点がある悪徳であろう。三つの悪徳については以下を参照。Nisula, op. cit., pp. 137-92.

³² Agaësseもこの点について指摘している。感覚的なものに魅了されることは、結果として生じることであって、悪の起源ではない。感覚的なものに魅了される前に、高慢の罪が生じている。そして、アダムの罪だけではなく、墮罪後における人間の肉の罪はすべて、高慢の罪を多かれ少なかれ含んでいるという(BA 16, Note 35.)。

そうした自分を忘れる、すなわち神から離れて自分自身によって神になろうとすることによって、獣のようになってしまうのである。自分を考えられなくなることは先に述べたように感覚的・物的なもの像によって引きずられ、惑わされることによって生じる。このようにして罰的・受動的なあり方と意志的・能動的なあり方はつながっているのである。事態を順序立てて述べるならば、墮罪による罰によって感覚的・物的なものに親密であり、それらに引きずられることによって自分を考えることができなくなる、すなわち神に従い、物的なものや身体的なものの上に立つという秩序に従うことができなくなる。こうして、高慢となって享受すべき神から離れることで、結果として外的なものにおける快樂に没頭し平安を失う³³。

結

本論文では、ペラギウス派論争の文脈から離れた著作である『三位一体』10-12巻の分析を行うことで、墮罪後の人間において歪んだ欲望が生じる際、罰的・受動的に生じるだけでなく、意志的・能動的にも生じると考えられていることを明らかにした。墮罪後の人間の欲望は、罰的・受動的なあり方と意志的・能動的なあり方が複雑に混ざり合いながら起きていた。まとめると以下のようなになる。墮罪による罰から、精神が感覚的・物的なものよりも親密になり、そこからそれらに巻き込まれ、本性的な自分を考えられなくなる。すると、享受すべき神から離れ、自分によって神のようになろうとする「高慢」が生じる。神から離れることは即、感覚的・物的なもの自体を目的とし、それを享受することにつながる。ここには神の類似を歪んだ形で求める欲求があった。こうして快樂に没頭し、貪欲・放埒・無力といった悲惨な状態になってしまう。

重要な点は、歪んだ欲望が生じる際に、墮罪の罰による感覚的・物的なものとの親密性という罰的・受動的なあり方がはじめにあるとしても、そこから本性的秩序に従った真の自己を考えることができなくなり、そうして神に背いて自分をたのみとするという意志的・能動的なあり方も生じていたという点である。これは、ペラギウス派論争著作においてはみられない欲望の側面であった。

³³ ここで重要な要素となっている「自分を考えること」は、特に『三位一体』において強調されている点である。それは『三位一体』の後半における主要なテーマが精神の自己知であるためであると考えられる。